くまにち論壇

慶応大大学院教授
蟹江 憲史
かにえ・のりちか　国際関係論、地球システムガバナンス。著書に「SDGs（持続可能な開発目標）」など。51歳。

変革を芽ぐむ時代の胎動

NHK大河ドラマ「麒麟（きりん）がくる」が先日、最終回を迎えた。安定した世の中にやってくるという麒麟。明智光秀は、その到来を夢見て本能寺に討ち入った。光秀自身が麒麟の到来を見ることはなかったが、そこから時代は加速度的に転換し、徳川家康によって天下太平の時代がもたらされる。

時代が変わる変革期というと、江戸時代が終わりを迎える明治維新がクローズアップされがちだ。しかし、そもそも幕末まで700年も続く武士の時代に入る時こそ、大きな変革であった。

保元物語や平治物語には、そのことが巧妙に描かれているという。1156年の保元の乱の結果が、貴族階級（公家）と武士階級の位置を逆転させる一大転機となり、中世はここをもって始まる。さらに興味深いことに、その変革は突然現れたのではなく、時代の胎動があってこその変革だと、保元や平治の物語は先見性をもって描いている。

武士は、地方豪族や有力農民から成長した在地領主が武装したというのが通説だ。しかし、最近の歴史学によれば、地方の有力な武士は中央貴族の血をひき、貴族と対立するのではなく、むしろ朝廷や貴族と結びついて農民を支配していたという。その象徴が源氏や平氏である。

こうした時代背景の下で、力をつけた武士の棟梁（とうりょう）としての源義朝が、従来であればかなわなかった上級貴族の証しである昇殿を果たし、それを朝廷や貴族も認めることで変革が始まっていく。むろん変革には軋轢（あつれき）も生じる。その様が見事に描かれているのがこれらの物語文学なのだ。

そこには現代に通じる教訓も数多く見いだせる。

下よりきざしつはるに堪へずして落つるなり

落葉は、まず葉が落ちて、その後に芽が出てくるのではない。下から芽ぐみが兆す力にこらえきれずに、古い葉が落ちるのだ。これは、徒然草155段からの引用である。この力が大きくなる時、大きな変革へのうねりとなる。

私事となるが父・蟹江秀明が、大河ドラマ終了の翌8日未明に息を引き取った。中世文学を研究し、そこでみると、人を見る眼力の深さの源が浮かび上がってくる。その一方で家族とのかかわりを大事にし、身近な環境で充足感を味わいながら生きていきたい、という人生観を持ち続けた偉大な父であった。

父の出身地である熊本には、私も幼少期から年に数回は訪れた。祖父母の家には熊本日日新聞があり、東京では見ない「日日」の文字に「何と読むのだろうか？」と頭をひねったことを思い出す。青年期には、熊本から時代の変化に挑んだ北里柴三郎や金栗四三ら多々の人物が出たことを学んだ。そして、今もこうして熊本との縁は続いている。

人は亡くなっても、残された者がその人の思いや考えを思い出し、生かしていくことで生き続ける。論語には「徳は孤ならず、必ず隣有り」との一説がある。常に人とのかかわりの下で人は生きている、というのも父の教えだ。コロナの時代、人との接触が制限されているからこそ、人と人とのつながりが大事なのだと実感する。

コロナ禍は、明らかに変革をもたらしている。しかし、ここでも変化は突然現れるわけではない。中世の物語が時代の先を見抜き、あるいは見抜こうとしていたように、時代の胎動を見極め、それを的確に把握することが変革に結び付いていく。現代に生きるわれわれの目の前には、変革を実行する好機がある。コロナ禍は命を脅かし、多くの人々を苦境に立たせているが、それでも時代を変えるチャンスが到来していると捉えられないだろうか。

時代の胎動を見極め、次なる世界を切り開きたい。